

## ■40年ギャップ説

教育改革は、20年後の「子どもたちが大人になる時代」を見据えて行うものです。しかし、教員や子どもたちの親世代の中には現時点での価値観を判断基準にしてしまったり、自身が受けた20年前の教育と比較してしまったりすることがあります。すると、教育改革でめざす教育とは40年のギャップが生じてしまい、教育改革が進まない一因になっていると言われています。

今、社会は人工知能やロボットの発達と関連する第4次産業革命の入り口に立っており、これまでにないスピードで変化しています。当然、社会が必要とする力も変わってきます。次期学習指導要領は、2030年の社会とさらにその先の未来を見通して改訂されました。これらの背景を踏まえ、教職員や保護者、地域の方と共に教育改革を進めてほしいと思います。

## ■夢中になって遊ぶ姿を見つめて——都跡こども園の取組から

次期学習指導要領では、これからの社会で必要とされる資質・能力が整理されました。そうした資質・能力を教員の教え込む授業ではなく、子どもの「主体的・対話的で深い学び」によって、子どもから引き出す授業が求められています。

都跡こども園では、すでにそのような保育が実現されているので紹介してもらいます。

都跡こども園では、園児が『もっとおもしろく』と夢中になって遊ぶ姿、子どもが自ら遊びを創り出していくプロセスを大切にしている保育を行っています。

5歳児の「ラーメン屋さんごっこ」では、草花や果物の皮、ひもでラーメンを作ります。「本物のラーメン屋さんみたいになりたい」という園児の思いが大きな目標です。園児はお店で見たエプロンを作ったり、新メニューを増やしたりと自ら考えて遊びを深めました。また、園児が夢中になって遊び、主体性と創造的な思考力を伸ばす姿に加え、保育者も遊びの展開を共に楽しんでいました。こうしたことも子どもの発想を大切に、子どもの育ちを支える保育者の援助や環境構成のあり方を考えることに繋がります。子どもたちが遊びを創り出し深めていく中で、あきらめることなく試行錯誤を重ねることで主体性や創造性、思考力を身に付けていきます。



こういった幼児教育の延長に小学校以降の学校教育があります。授業の中で、子どもが夢中になって学ぶ姿があるでしょうか。学びの原点は、この「夢中になる」ということにあると思います。人間には生まれた時から、自ら進んで関わり、環境を通して学んでいく力を持っていると思います。私たち自身がそうであったように初めての体験・初めて出会う世界が子どもたちにとっては興味の対象であり、だからこそ子どもたちは夢中になってそこへ向かっていくのだと思います。そんな夢中になっていく姿が都跡こども園の取組にあると思いますし、関わっている大人も、そういった子どもたちの夢中になっている姿を大事にして

おられると感じました。そうやって学んできた子どもたちが小学校 1 年生になった時に、教師から一方的に教えるだけの授業では、おもしろさに欠け、学ぶ意欲を減少させてしまいます。次期学習指導要領が示している「主体的・対話的で深い学び」とは全く異なる「受動的・一方的で退屈な学び」にしかありません。子どもたちが生まれた時から旺盛に行ってきた「夢中になる」ことを踏まえてこそ「主体的・対話的で深い学び」の実現が可能となります。

## ■「啐啄同時（そったくどうじ）」

子どもが夢中になって学ぶ授業、教員はそうした授業を目指さなければなりません。そのヒントになる言葉に「啐啄同時」があります。「啐（そつ）」は鳥のヒナが卵の殻をつつくことで、「啄（たく）」は親鳥が卵の外から殻をつつくことをいいます。ヒナは時間をかけて殻をつつき、殻を割っていきますが、親鳥はヒナに合わせてそれを応援するように、外からつついてやります。そのタイミングを合わせることを「啐啄同時」と言います。ヒナがつくより先に親鳥がつついてしまえば、ヒナは孵ることができません。これは、教育にも当てはまることだと思います。子どもが自分でやろうとしているのを待ちきれず、先回りして何でも準備し、手助けして教え込むのは、親鳥が無理やり殻を割るのと同じことです。

子どもたちは本来、自分で学んでいく力を持っています。教師の関わり方次第ではその力を伸ばすことも、潰してしまうこともあります。先ほどの幼児教育の事例ではこの「啐啄同時」を絶妙なタイミングで行っていると感じました。



## ■まずは自分の意識から改革を

冒頭、40年ギャップの話で、教育改革の難しさについて話をしましたが、20年よりもさらに先の世界をみると、教育改革を今進めなければならないと気付くはずです。

2050年には世界の人口は100億人に近づき、インドと中国だけで世界の人口の3割以上を占めることになると言われていています。その時の日本の人口は1億人と予測され、世界の総人口のわずか1%にしか過ぎません。ますますグローバル化し、国籍の壁を越え、多様で複雑な社会になっていくと思います。私たちの想像できない世界を子どもたちは生きていくのです。

そのような時代の変わり目をしっかりと捉えて、時代に必要とされる力を子どもたちに身に付けさせていくために、大切にしたいことが日々の授業です。まずは、教員が子どもた



ちにどのような力をつけるべきかを分析して、授業改善に取り組む姿勢を自ら持たなければ改革にはつながりません。個々の教員が力量を上げるのは当然ですが、学校組織として、定期的な研修の機会を保障することや、研究授業や研究会において授業を改善していくことが最も大切です。

本来子どもたちは好奇心に満ちていて、自然と夢中になって取り組む姿をもっています。未来を生きていく子どもたちが日々の授業や奈良市の事業を通して夢中になることができるように、2学期からも様々なことに取り組んでいただきたいと思います。